

第2章 日常 雲の上はいつも晴れ

演歌

演歌歌手の美川憲一が『おんなの朝』を歌った。「朝が来たのね、さよならね」この歌は、朝に「さようなら」と別れを言う女の歌です。演歌は下品なので奥様方から嫌われるのが、わかります。この歌はとうてい子供には聴かせられません。

『津軽のふるさと』を、新人テノール歌手が歌うことになりました。知っている人は懐かしく感じ、知らない人は、どのような曲かと期待したことでしょう。「りんごの故郷は 北国の果て」。なんと、歌手はオペラのアリア風に歌いました。みんなの期待は裏切られ、だいなしになりました。司会者もあきれて一言のコメントもありません。夫が「コメディアン伊東四郎の方が、うまい」と言いました。そもそもオペラの歌手が演歌を歌う事に無理があります。

平成二十三年(2011年)十月二日、NHKのど自慢を観ていると、おばあさんが『津軽のふるさと』を歌い出しました。“うまいな”とっていると合格の鐘が鳴り響きました。「昔、親に連れて行ってもらって観た映画の歌で、それから気に入って歌っています」と合格者が言うと、司会者が、すかさず「この歌のヒットは昭和二十七年でしたよね」と言いました。さらに、おばあさんは、今週のチャンピオンにも選ばれてゲストの演歌歌手・瀬川瑛子さんからトロフィーをもらいました。瀬川さんが「澄んだ声で、すばらしかったです」と讃えました。音楽大学で勉強したであろう若くてハンサムなオペラ歌手は、一般のおばあさんに負けました。

演歌歌手になくてはならないものが二つあります。まず、唸る演歌むきの声を持つ

ていること。演歌を歌う声は普通ではいけません。普通の声だと、どの曲を歌っても明るく楽しくなってしまいます。

そして、演歌を歌うには暗い過去があること。元暴走族だったり、家出の経験がある、職を転々とする、出稼ぎ、離婚、酒場の流し、傷害事件で警察の世話になった事があったりするなど。育った環境が良い場合には、どうしても歌声は明るく楽しくなるものです。

このように、演歌一曲でも簡単なものではありません。演歌は人生そのものなのです。

歌の基準

歌の「うまい」「へた」の決め方は、人によって違います。何か基準があるようです。過去に聴いた歌声と比べるのでしょうか。

「おじいちゃん」の歌の基準

『NHKのだ自慢』を観ながら「合格だ」と、おじいちゃんが言います。おばあちゃんも「そうねえ」と言います。すると、ほとんど合格の鐘が鳴ります。「やっぱりなあ、うまいもんだ」と、おじいちゃんは、にこにこ顔です。過去に聴いた岡本敦郎や、霧島昇、藤山一郎と、比べているようです。直立不動で腹から声を出すというのが、好い歌い方の基本でした。

では、岡本敦郎や、霧島昇、藤山一郎の歌い方は、本当にすばらしいのでしょうか。実は今では古い歌い方です。

「編集者」の歌の基準

川崎にあった自費出版社で最初の童謡の本『童謡を歌おう』を出版しました。編集

の若い男性が意外なことを言いました。「由紀さおり、安田祥子姉妹の歌は、声が合っていない。あれは全然だめだ」と。編集の男性は、童謡をほとんど知りませんでした。それが証拠には、作曲家の「本居長世」を「もとおりがよ」と読んでいました。しかし、この姉妹への批判は驚きでした。

由紀さおり、安田祥子姉妹のコンサート会場は、いつも満員です。由紀さおりは、小さいころから童謡を歌い、その声で演歌も歌っています。姉の安田祥子も童謡歌手でしたが、音楽大学で声楽の発声を学び、オペラを勉強しました。二人は全く違う発声で最近一緒にステージで童謡や唱歌を歌っています。編集者が「声が合っていない」というのは当たっています。

童謡歌手に川田正子、孝子姉妹がいました。彼らは、最初から声の質が違う事を知っていました。二人で歌うことはほとんどありませんでした。二人が掛け合いで歌った『蛙の笛』は名盤として残っていますが、川田正子は、「良いきではない」と言っています。声の質が違う事をあげて、二人で活動しなくてよかったとも言っています。

では、ビリーバンバンの『白いブランコ』や、狩人の『あずさ2号』は、どうでしょうか。曲は大ヒットしました。声の質が合っていて、すばらしいハーモニーだったからヒットしたのでしょうか。

サイモンとガーファンクルはどうでしょうか。甘いハーモニーで世界中を魅了しました。『サウンド・オブ・サイレンス』は、最大のヒットとなりました。私もCDを買いに行ったほどです。しかし、高音のパートを歌うガーファンクルの声が出なくなると、解散しました。

「童謡愛好者」の歌の基準

私が主宰する童謡の会では、『かあさんの歌』を歌う時、いつも倍賞千恵子さんの歌

を聴きます。あたたかく、美しい歌声が部屋中に響きます。聴き終わると大きな拍手です。『城ヶ島の雨』も聴きました。みんなで感動しました。素晴らしい歌唱力です。倍賞千恵子は、童謡を歌う少女歌手でした。今は渥美清主演の映画『男はつらいよ・フーテンの寅さん』の妹のさくら役で女優として日本中に知れ渡っています。高倉健との映画『黄色いハンカチ』が好評だったため、高倉健の奥さんと思っている人までいるようですが、それは映画の中だけの話です。

童謡の会では、私が「童謡や唱歌の歌い方は、ビブラートを取り、まっすぐに声を出す。自然体で歌う」と教えているので、倍賞千恵子が歌う『かあさんの歌』、『城ヶ島の雨』を聴くと、会員が「いいわねえ」、「大好き」と言って、拍手喝采をします。

過去の童謡の少女歌手は、かわいい声・高い声が求められ、喉をつめて地声を張り上げる発声を指導されました。そのため、すぐに歌えなくなり、引退し、次々に新しい少女歌手が登場しました。頭に大きなリボンを付けた少女歌手たちは、人々のあこがれの的で、一般の貧しい生活をしていた母親たちは、自分の子供も同じように可愛くしようと、競ってリボンを付けさせました。歌い方も、みんなが真似をしました。童謡の会の会員は、当時の少女歌手の歌い方が大好きです。懐かしく聴き入ります。

「クラシック愛好者」の歌の基準

クラシック愛好者は、発声を一番気にします。「三大テノール歌手」、プラシド・ドミンゴ、ホセ・カレーラス、ルチアーノ・パヴァロッチィの声と、『千の風になって』を歌う秋川雅史の声とは比較になりません。そもそも比較する方が間違っています。

オペラ歌手の島田祐子は、発声に悩み続けて、引退してしまいました。「オペラから童謡まで歌える歌手」と言われた人は、みんな発声に悩んだようです。オペラと童謡

では音域が全然違いますから当然でしょう。オペラ歌手に童謡は歌えません。それでも、世の中は「きれいな声の人」つまりオペラ歌手に童謡を歌う事を求めてやみません。

ある「コンサート」にて

歌のお姉さん『しゅうさえこ』のコンサートがありました。隣に座った人が、「この人は、かわいしい、いい声よねえ。大好き」と話しかけて来ました。私は、「ええ、そうですね、今日は楽しみですね」と言いました。

ところが、後ろの席の人の会話が聞こえて来ました。「この人は、どの曲を歌っても同じ歌い方だ。曲によって歌い方を変えたらいいのに」と。あれ、それなら、なぜ聴きに来ているのだろうかと驚きました。コンサートは、ファンが集うだけでなく、批判的な人も来ている事を知りました。コンサート会場を後にする時、後ろの席の人の言い分も一理あるなと思いました。他人のコンサートは勉強になります。

NHK 合唱コンクールに思う

NHK合唱コンクールがありました。平成二十三年(2011年)、中学校の部の課題曲は「証(あかし)」でした。この曲がコンクールが終わっても人気です。若者がみんな口ずさんでいます。若者に人気の曲にも耳を傾けましょう。ひとまとめにして「こんな曲、大嫌い」と叫んだら簡単に終わってしまいます。若者たちが好きだという曲に耳を傾け、若者の心にも寄り添いたいものです。

「この曲の指導は難しい。簡単に見下すと、軽いだけの曲で終わってしまう。感動的に歌い上げるには技術がいる。教育の現場は今すごいな」と私は思っています。

歌は生きもの

クラシックでも流行歌でも、昔の人の歌い方は古く、今の歌い手と歌い方が違いま

す。そのように感じるのは、なぜでしょうか。ファッションも、昔の洋服や髪型やメイクは、今と全然違い、一見して「古いなあ」と思います。

今の歌のほとんどは、バラード系で言葉の意味が軽い。つぶやくように歌います。昔は、ドラマチックで失恋の歌が多かった。美空ひばりが『リンゴ追分』を歌う。これはフィクションです。美空ひばりの気持ちではありません。今のシンガーソングライターは、自分の気持ちを歌っています。平成二十二年(2010年)は『トイレの神様』が一世を風靡し、大晦日のNHK紅白歌合戦では日本中を泣かせました。

しかし、良い歌だと思わない人もいます。それが詩や歌の難しい所です。ひとつの歌がヒットすると、みんながそれに流れます。そして同じ歌い方になります。しかし、ずっと続くわけではなく、好い歌であっても、あきらめます。すると、また新たなものが生まれます。違う系統の歌や歌い方が次々に生まれるのです。歌は、時代と共に進化し続けている生きものなのです。

サンシュユ

私は、サンシュユの花が大好きです。サンシュユは、桜が咲く頃にひっそりと咲きます。松田町の延命寺の門前の桜の側に植えてあります。みごとな大木ですが、知る人はありません。「桜がきれいに咲きました」と言う人があっても、「サンシュユが見事に咲いた」と言う人はありません。今年は桜(ソメイヨシノ)の開花が遅れたので、サンシュユだけが咲いています。満開になっても寂しそうな花です。眺めていると、「俺が南足柄から運んで、ここに植えた」という男の人が現われたので驚きました。

さて、民謡の『ひえつき節』に歌われている「サンシュウの木」とは、「春に黄色い可憐な花を咲かせるサンシュユの木で、これに恋人が鈴をつけるのだらう。だから切

なくロマンチックなのだ」と思い込んでいましたが、間違いのようです。

発祥の地とされる宮崎県東臼杵郡椎葉村では、「山椒(サンショウ)」のことをなまって「サンシュウ」と発音するのだそうです。したがって、唄う時はその村の方言で「さんしゅう」と唄います。山椒は、山地に自生し、初夏に黄緑色の花を咲かせます。

ひえつき節

一、庭の山椒の木 鳴る鈴かけてヨーホイ

鈴の鳴る時や 出しておじゃれヨー

二、鈴の鳴る時や 何と云うて出ましょヨーホイ

駒に水くりよと 云うて出ましょヨー

三、おまや平家の 公達流れヨーホイ

おまや追討の 那須の末ヨー

四、那須の大八 鶴富捨ててヨーホイ

椎葉たつ時や 目に涙ヨー

『平家伝説』

壇ノ浦の戦いに敗れた平家の残党の一団がたどり着いたのが椎葉で、この山奥でひっそりと農耕生活をはじめました。

しかし、この隠れ里も鎌倉の知る所となり、その追討の命が、船上の扇の的を射ぬいた事で有名な弓の名手・那須与一宗高にくだりました。当時、病の兄に代わって追討の命を遂行したのは、弟の大八郎宗久でした。

椎葉の平家落人たちのつつましい、身をやつした生活を目の当たりにした大八郎は手を下そうとせず、この土地に住みます。さらに、平清盛の末裔、鶴富姫との間に子供をもうけました。

折りしも大八郎に鎌倉への帰還命令が下りました。敵の姫を連れて行くわけにも行かず、別れの印に名刀・天国丸を与え、「生まれた子が男子なら我が故郷の下野(しもつけ)の国へ、女ならこの地で育てよ」と言い身重な鶴富を残し、大八郎は再び関東へ上がるのでした。

『ひえつき節』は、もともと自由に創作して唄う労働歌でした。今、唄われているのは、昭和の初めに平家伝説を織り込んで創った物が広まったものです。ひえつき節の発祥の地である椎葉村尾八重地区のひえつき節保存会によると、昔、古老が唄っていたのは、今の歌詞ではなかったそうです。稗を搗くのは重労働ですから、少しでも気がまぎれるように、とんちの効いた面白いものや、わいせつな歌詞が多かったようです。正しい歌詞が統一されていないので、唄い手により、どう唄っても特に間違いではありません。

唄い方は、節回しの違いでいくつかの種類があります。「正調」は、昔からずっと椎葉で唄われてきた唄い回しの事、「一般」は、正調を基に覚えやすく親しみやすいようにアレンジされた唄い回しの事です。

椎葉村では毎年『ひえつき節日本一大会』が開催されています。『ひえつき節歌詞コンクール』の発表もあり、新しい歌詞が生まれています(宮崎県椎葉村役場企画観光課による)。

記念すべき第二十回だった平成十六年(2004年)は、九州に上陸した台風被害の影響

で中止でした。平成十七年(2005年)九月二十日、椎葉村役場からのメールによると、「台風十四号の被害は、過去に例のないもので、三名の貴い命が失われ、家屋の全壊も二十以上にのぼっています。今も電話が復旧していない地区があるほか、道路も幹線道のいくつかが全面通行止めになっています。『ひえつき節 日本一大会』も、とても実施できる状況になく中止としました。二年続けての中止で、とても残念で悔しい思いをしています。しかし、いつまでも嘆いてばかりおられませんので、少しずつ復旧に向けての取り組みを行っているところです。椎葉の山々に『ひえつき節』の歌声が響き渡る日が早く来るように頑張っていきたいと思います。その後、『ひえつき節 日本一大会』は、どうなっているのでしょうか。

知らない

田舎で暮らしていると何でもない事が、都会では珍しい事になるようです。

「キュウリ」を知らない

ある時、テレビタレントの石原良純さんが「キュウリ」をもぎ取って叫んだ。「イテ一ッ、トゲがある」その場にいた黒柳徹子さんも、「まあ、あら本当だわ。キュウリってトゲがあるのね。知らなかったわ。痛いわねえ。トゲも食べられるのかしら？」と言った。

キュウリは、トゲがあり黄色い花が付いている物が一番新鮮に決まっている。芸能界一の知識人でも普通の事を知らなかった。

「落花生」を知らない

ある時、モデルの女の子がプランターから引き抜いた「落花生」を見て驚いていた。「これが、落花生なの」。その場にいたタレントも全員驚いていた。コーヒー豆や、ブ

ドウのように、木の枝になっていると思っていたようだった。

落花生は、塩ピーナッツも、おいしいが、ゆでたのもおいしい。ゆでた物は「うでピー」といい神奈川県秦野市の名産。秦野市では、昔、タバコ農家の多くが、タバコの中に落花生を植えていた。黄色い小さな花が咲き、秋に収穫する。しだいに落花生を作る農家が無くなり、収穫が少なくなったので高価になった。新豆の落花生は「味」があり、特別においしい。

「ラッキョウ」を知らない

ある時、NHKテレビ『キッチンが走る』が、小田原市久野に旬の食材をさがしに来た。放送は二十二年三月十一日の予定だったが、東日本大震災のため中止され、六月に放送された。

タレントの杉浦太陽は戸惑っていた。「どこにラッキョウがあるんだ」「トントンと、こうやって泥を落とす」と教えられて、ようやくラッキョウが出て来たが、「これってラッキョウなんですか。まじで。ラッキョウが生えている所を初めて見たよ。へー、ラッキョウって、こんななんだ。ここの土地全部そうなの」。キュウイフルーツの木の下で「ラッキョウ」が栽培されていた。見ればラッキョウ畑だと、すぐわかることですが。太陽君は、ラッキョウが大きな木の枝に一粒ずつなっているとでも思っていたのだろうか。「白い花が咲くんです」と農家の主婦が言ったが、もう聞いていなかった。

ラッキョウは、普通、甘酢に漬け込むが、採れたては味噌を付けて食べてもおいしい。天ぷらにしてもおいしい。ラッキョウは、「一日三粒、血液サラサラ」ともいわれる食材です。

「ショウガ」を知らない

ある時、テレビで四万十川の源流を探る旅のロケがあった。上流に行くと、「ショウ

ガ」を栽培している農家があった。若いタレントが「これはなんですか」と訪ねた。あれ、ショウガを知らないのだ。葉を見ればわかるのにとっていると、「これがショウガですか。土にある所を初めて見た。掘っていいですか？引っぱればいいんですか」。そして、農家の人が、「食べてみるか。水がいいから、みずみずしくて、大きいのができる」と言い、ナイフで皮をむいて渡した。青年は、大口でガブリと噛んだ。当然、「あ。み、水をください!!」と言って、悲鳴をあげた。テレビだから、口から吐き捨てるわけにはいかない。農家の人が「味噌を付けて食べるとうまい」と言ったが、もう聞いていなかった。「からーい」。

「キンケイギク」を知らない

ある日の神奈川新聞に目が釘づけになった。「北米原産のキク科の多年草で、高さ三十～七十センチ、五～七月に咲く花が美しいため、明治時代に観光目的で輸入された。鹿児島県の特攻基地付近に咲いていたといわれ、「特攻花」と呼ばれることもある。」「キンケイギク」が、近年、セイタカアワダチソウにとって代わって辺り一面に咲くようになった。初夏の花として定着しつつある。繁殖力が強い事は、目に見えて明らか。2006年に特定外来生物に指定された。自宅などで許可なく栽培すると罰せられる。

この話を童謡の会ですると、「ウチの庭に沢山咲いているわ」と言う人がいる一方で、「見た事がない。この辺にも咲いていますか」と言う人もあった。見ていても、認識しない場合がある。きれいな花が咲いていても、花に関心がない人は気が付かないものです。キンケイギクは雑草だから、気が付かないのも無理はありません。雑草を植えて懲役、罰金では合わない。私は、セイタカアワダチソウも、キンケイギクも好きです。

(註) 特定外来生物

生態系、人、農林水産業への被害防止などのため、外来生物法に基づき飼育や栽培、保管や運搬が規制されている外来の動植物。個人が無許可で飼育や栽培をすると、懲役一年以下もしくは百万円以下の罰金。販売目的なら同三年以下もしくは三百万円以下の罰金が科せられる。

言葉の力

人は、勝手な事を言うものです。そのつどカッとなっていたら、生きて行けません。

「その人の気持ちになって話すように」と、小学校で教わった道徳を時々思い出しています。あれは、なんだったのでしょうか。人は他人の気持ちになどなれるはずがありません。人にかける言葉は大切です。人の喜ぶ言葉をかけましょう。

言葉の力「畑で」

今日は、秋晴れの下、コスモス畑の草むしりをした。夏中、畑の半分は草をむしらず放置していた。通りがかりに人々が「一人じゃあ草を、むしりきれないでしょう」「広げりゃ広いで大変だね」「もうやめたら」と言った。

その人々が秋風に揺れる満開のコスモスを見て、「みごとなお花畑ね」「心が洗われるようね」「ステキね。私はいつも花に向かって、『咲いてくれてありがとう』って言う事にしているのよ」などと言って通った。夏中、草をむしらなかつたのは、コスモスが十センチほどに生長していたからです。コスモスは、最初はか細い。

言葉の力「路上で」

私は、いつも大荷物を持って歩いています。自称「荷物人間」。いつも大荷物なので、それが普通です。ところがある日、知人から「大きな荷物ですね、重そうですね、大

丈夫ですか」と声をかけられた。すると突然、その荷物がずっしりと重くなり、駅から家までの二十分間が、つらかった。重くて重くて、やっと帰宅した。

言葉の力「夫から」

私は、「ろくちゃん」という野良猫をかわいがっています。「ろくちゃん、御飯だよ」とか、「ろくちゃん、元気かい」と声までかけて、かわいがっています。ある日、夫が猫を見て、「目つきの鋭い猫ですね」と言った。すると突然、可愛いと思っていたその猫が、目つきの悪い野良猫になったような気がした。さらに、娘が「なぜ、ろくちゃんという名前なの」と聞いた。意味などなく付けた名前なので困っていると、すかさず夫が「黒の反対さ、汚れて汚い猫だからさ」と平気で説明した。私は、その言葉に衝撃を受けた。なるほど、よく見ると、白い毛が汚れて黒っぽくなっていて、汚らしい。この会話を「ろくちゃん」が聞いていたら怒るだろうなあ。夫から「なぜ、ろくちゃんという名前なの」と聞かれた時、「なんとなくつけた名前だよ」と言っていた私なのに、夫のとんでもない解釈に、「そうだったのか」と、大受けして手までたたいて笑っているのだから。

言葉の力「駅で」

聞くとゾツとする言葉がまかり通っている。「でけエ」、「やべエ」、「うめエ」、「こえエ」、「すげエ」、「いてエ」。若い人だけでなく、これを注意すべき中高年の大人も使って、はばからない。NHKの司会者やゲストも平気で使っている。その言い方が、時として気持ちを素直に表現できると思って使うのだろうが、はっきり言って下品です。

ある日、「人身事故のため下り電車が遅れています。大変ご迷惑をおかけしています」と放送があった。プラットホームにいた浴衣姿の女の子が「死ねよ」と叫んだ。きれいに化粧をしたカワイイ子の口から出た言葉とは思えなかった。

この娘さんに子供ができ、その子が「死ねよ」と言った時、「死ねよという言葉は、二度と言ってはいけない」と注意できるだろうか。

汚い言葉で怒鳴れば、相手は、それ以上に汚い言葉で怒鳴り返します。それでは、注意をした事になりません。人は、丁寧な言葉の人に優しさや温かさを感じるものです。それは尊敬につながります。だれもが、そう願って我が子を育てます。言葉はその人の心そのものです。

言葉の力「レジで」

買物をした。アルバイトの青年が読み上げながらレジを打った。「チビトマト 円入ります」。私は仰天した。私が買ったのは、「ミニトマト」であって、決して「チビトマト」ではない。その聞きなれない名前に驚き、めまいすら覚えた。自分の事を「チビ」と言われたわけではなかったのだが。

発想

小田急線に赤い電車が走り始めました。新松田駅と小田原駅(または箱根湯本駅)間を往復する各駅停車です。赤いので、まるで郵便ポストのようです。最初見た時は、郵便物を運ぶ車両かと思ったほどです。なぜ、このような色にしてしまったのか疑問でした。

ある日、父親が五歳ぐらいの男の子を連れて電車を見に来ていました。男の子は、赤い電車を見るのは始めてのようでした。そして、「お菓子の電車だね、きれいだね」と言いました。私は驚きました。同じ赤い電車を見ても発想が違います。男の子には夢があります。さらに驚いた事には、私が次に赤い電車を見た時、「美味しそうな、お菓子の電車」に見えた事です。乗るのも楽しみになりました。ちょっとした発想の転

換で人生は楽しくなるものです。それを小さい子供に教えられました。ところで、この子の父親は、このかわいい発言を聞き逃したようです。「危ないから、向こう側に渡って見よう」と言いました。これでは父と子の受け答えになっていません。父親は、“もったいない”事をしました。

(註)現在(平成二十七年)、赤い電車は小田原駅と箱根湯本駅を往復する各駅停車になりました。赤いので、わかりやすい。小田原駅と新松田駅間は走っていません。

聞きかじった話

どこで聞いたのか、どこで読んだのか、本当の話なのか、さだかでない話です。

聞きかじった話「マリア・カラス」

オペラ歌手のマリア・カラスは、夕食の後、長風呂を楽しんで、そして歌の練習に入る。夜中の十二時、一時からである。それが延々と朝の三時、四時まで続く。しかし、そのアパートの住人は、だれ一人一度も文句を言わなかったそうです。

聞きかじった話「リチャード・クレイダーマン」

老人が散歩をしていると、ある家から、きれいなピアノの演奏が聞こえてきた。その甘い音色に誘われて足を止めた。そして壁によりかかったまま、長い時間聴き入った。天国にいるようであった。その家は、「ピアノの貴公子」と言われるピアニストのリチャード・クレイダーマンの家だった。ありそうな話です。

聞きかじった話「菅原洋一」

歌手の菅原洋一が歌謡曲の番組で『忘れな草をあなたに』を歌った。夫が、「もう声が出ないけれど、声楽の発声で丁寧に歌うように心がけているね」と言った。

私が、音大生だった頃、声楽の個人レッスンを受けていた先生から聞いた話を思い

出した。ある時、先生が声楽家・関種子の家にレッスンに行くと、菅原洋一が先にレッスンを受けていて叱られていた。「あなたの歌い方は、口先だけで歌謡曲を歌っているようだわ。全然だめだわ」と。

菅原洋一は国立音楽大学声楽専攻科を卒業すると同時にオペラではなく、歌謡曲の歌手になった。シャンソンやタンゴを歌っていたが、『知りたくないの』が大ヒットした。作詞家・なかにし礼は、このシャンソンのメロディーに歌詞を当てはめる時、「あなたの 過去など 知りたくないの」と書いた。「過去」が上から下に下がる音符だったため、「過去」の言葉のアクセントがぴったりだったが、菅原洋一は、「過去」という言葉は歌いにくかったので、「変えてほしい」と言った。しかし、なかにし礼は譲らなかった。リハーサルをしてみると、これが、すばらしかった。『知りたくないの』は菅原洋一を歌手としてゆるぎないものにした。今や、この歌を日本人で知らない人はいない。

ところで、私が個人レッスンを受けていた先生は、東京都日野市に住んでいて、引退したオペラ歌手・島田祐子(小学校一年から高校卒業まで小田原市在住)の本名と同じだったので、ファンレターや、お中元やお歳暮が間違えて配達されていたようだった。ありそうな話です。

(註)『新歌謡曲』は、日本放送協会大阪中央放送局(JOBK)で、昭和十一年四月二十九日から放送が始まった。「野薔薇の歌」は、『新歌謡曲』の第一回作品の一つ。昭和十一年四月二十九日、関種子の歌で電波に乗った。

聞きかじった話「足の指」

ある日、映画を観ていると、女優の工藤夕貴が口にタバコをくわえて、足の親指と人差し指を起用に使ってマッチで火をつけた。それを観た私は、興奮して叫んだ。「私に

もできるわ。私もハリウッドの映画に出演できるわ!」と。すると夫が「足の指でマッチがすれるのはすごいけれど、それだけでは、ハリウッドのスターにはなれません」と、まじめに言った。

私は、机の下に落ちた鉛筆、消しゴム、紙、本、その他何でも足の親指と人差指の間に挟んで拾い上げる事ができる。親指と人差指の間は、広く開いていて、自由自在に使える。一方、夫の親指と人差指の間は、ほとんど開いていない。何も挟めない。

この足の指については、奇妙な事を覚えている。テルアビブで空港乱射事件が起きた。実行犯の三人の内、二人は死亡。一人だけ捉えられた。それが日本赤軍メンバーの岡本公三かどうか調べてほしいと日本政府に依頼があった。日本政府が送り込んだ調査員は、この黙秘権を使っている男が日本人かどうか、足の親指と人差指の間隔を見た。日本人は、小さい頃から下駄や草履を履いているので親指と人差指の間が広く開いている。それで日本人と判断した。彼は岡本公三であった。

夫が、「よくそんな事を覚えているね」と言うので、書いておくことにしました。私は小さい頃、下駄やゴム草履を履いて縄跳びや石蹴りをして遊んでいました。一方、体の弱かった夫は、ほとんど外遊びをせず、本を読んで室内で過ごしていたようです。日本人が、だれでも親指と人差指の間が広く開いているというのは、今や伝説となりそうです。

聞きかじった話「ホーチミン」

ベトナムのホーチミンは頭を抱えていた。これから国をどのように動かしたらよいか思案に暮れていた。

ある日、自分が留学していたフランスに助けを求める事を思いついた。熱心に交渉したが、フランスは動かなかった。帰国の船上で頭を抱え座り込んだ。「国を救うには、

どうしたらいいのか』。長い時間が経過して、顔を上げ立ち上がった時、ベトナムの人民と共に戦うことを決意していた。そして先頭に立って突き進んで行った。ホーチミンは国の英雄になった。

これは、どこで聞いたのか、どこで読んだのか、本当に覚えていませんが、童謡の会で難問に立ち向かう時、私はいつも、この時のホーチミンを思う。ホーチミンはベトナム一国を背負っていたので、スケールが全然違うが、私は、童謡の会員を信じてやって行く事にしている。応援をしてくれる人は大勢いる。それはうれしい事です。まだまだ頑張ろうと思っています。

趣味

夫はモーツァルトを聴くのが趣味です。DVDやCDを買い集めています。たとえば「トルコ行進曲」「魔笛」などはいろいろな人の演奏を持っていて、聴き比べています。「趣味に」は、時間とお金をかけるものです。

ハンディキャップ

人が頑張る時、何らかのハンディキャップがあるものです。それは、思いがけない事の場合があります。

「体が小さい男」の場合

彼は一度も相撲に勝った事がない。これは、男にとって屈辱である。彼は一生懸命に勉強した。そして難関だった師範学校に合格し、教員になった。多くの受験生を勝ち抜いて教員になれた事は、その後の男の人生の支えになっている。

「体が小さい女」の場合

女の手は、とても小さかった。それでもピアノの練習をした。練習をすればするほ

ど、肩がこり、手首がつるようだったが、ひたすら努力した。オクターブが楽々とどく人には、わからない涙ぐましい努力があった。その結果、音楽大学に合格し、音楽教師になった。ピアノ教室の小さな先生は、小さな子供たちに人気があった。

「背の高い女」の場合

彼女は、小学校から最後尾に並んでいた。背が高いため、何をしても目立つ。思春期には、自分より背の高いボーイフレンドがないという悩みがあった。小さい体もハンディなら、大きいこともハンディとなる。彼女はバレーボールに打ち込んだ。死に物狂いでボールを打って練習を重ねた。

背の高いことで、ボールを左右自在に打ち分け、世界一のセッターになった。

「美しい女」の場合

美人がハンディなどとは贅沢な話だ。しかし、普通やそれ以下の者にはわからない深刻な悩みなのだ。いつも、だれからも美人と言われ続けるのは苦痛であった。そして勉強に没頭した。

その結果、医学博士となり、大きな病院を開業し、院長となった。腕のいい美人の医者なので、みんなの信頼は厚く繁盛している。

このようにハンディキャップはマイナスではなく、大きなプラスの要素がある。そのことに気がついていない人が多い。

手話

娘が、保育園から転校して初めて幼稚園に行った日、手話で『手のひらを太陽に』を覚えて帰宅しました。歌いながら手話をしてくれ、当時、手話を知らなかった私は、感動したのを覚えています。そして手話を勉強するため、小田原駅前の本屋の二階の

棚にあった手話の本を全て買いました。しかし、手話を勉強してみると、日常使う言葉の数に比べ、手話の数が足りないため、細かいニュアンス、日本語の持っている独特の言い回しが表現できません。再び本屋に行き、店員に、「先日買った手話の本より上級の手話の本はありませんか?」と尋ねました。店員は、二階の棚を見て、「ここにズラッと、沢山並んでいたのですが。ありませんね。おかしいですね」と言いました。「この棚にあった本は、私が全部買いましたよ」と言うと、店員は、ビックリして私を見ました。

その後、「良い匂い」や「故郷」「古巣」「忘れがたき」「丸い大きなお月さま」「数字の10は、煙突とお月さま」などでつまずき、手話の勉強は中断しています。平成二十三年(2011年)六月、テレビを観ていると、『手話事典』が二千語を追加し、改訂版が出版されたニュースが流れた。私が思った通り、手話の数が不足でした。

無言

「マーケット」で無言

近所のマーケットのレジで驚く事があった。会計がすむと、買い物かごの中に造花のカーネーションが一本入っていた。「今日は母の日、粋^{いき}なはからいをするマーケットだ」と思っていると、前にレジを通った人が、「こんな物が入っていたけれど買った覚えはないわ!」と言った。すると、レジの青年が「沢山お買物をしていただいたお客様には、母の日のプレゼントとしてカーネーションをお渡ししています」と言った。客は、「あら、そう」と言い、持ち帰った。レジの青年は忙しかったので、無言でカーネーションを買物かごに入れていたのだろうが、説明がなければ不思議に思うものです。これでは素晴らしい企画も生かされません。ひと言「母の日のサービスです」と

言えばよかったのに。母の日が来るたびに思い出される出来事です。

「ロッカー」で無言

人間ドックを受けた。狭いロッカーで着替えていると、無言で立っている人があった。不思議に思ったが、そのまま着替えていた。2番ロッカーに着替えた物や、荷物を入れて出ようとした時、何故その人が立っているのか気が付いた。その無言で立っている人は、なんと、3番ロッカーを使うはずの人だった。「すみません、言っていたければよかったです。気が付きませんでした」と私は謝った。しかし相手は無言のままだった。そして3番ロッカーを使った。

そのロッカーは細く、2番ロッカーのドアを閉めなければ、3番ロッカーが使えないのだった。それは、ひと言「3番ロッカーを使います」と言えばすむことだった。言葉に出さなければわからないものです。

「車内」で無言

電車の入り口のドアの前に白いケースの忘れ物を発見した。ちょうど車掌が来たので知らせた。車掌は「これは、あなたの物ですか?」とドア側に座っている男性に声をかけた。しかし男は無言だった。居眠りを邪魔されて迷惑そうだった。次に車掌は私に向かって「次の小田原駅の保管室に届けます」と言った。私は「お願いします」と答えた。

そこには大勢の乗客がいた。だれもが無言だった。私以外、白いケースの忘れ物に気が付いた人がいなかったのだろうか。

「お父さん」は無言

「私は『お父さんは偉い人、立派な人』と言って子供たちを育てました。ですから、二人ともお父さんを尊敬しています。うまく育てられたと思っています。みんなが集

まる今年の元旦には、ひと言『お母さんも頑張っている』と言ってください」と言う
と夫は簡単にこう言った。「お母さんが頑張っているのは、みんながわかっているから、
言わなくてもいい」と。無言では、何もはじまらないと思っている私とは、ずいぶん
考え方が違います。こうして、もう何回も正月が過ぎました。

まぎらわしい

平成二十三年(2011年)四月三十日深夜、NHKテレビ『今夜も生で さだまさし』
という番組を観ていたら、次のようなお便りが読まれました。

「先日、さださんのコンサートに行きました。時間ぎりぎり間に合ったと思ったので
すが、会場には、中学生の吹奏楽部が、いろいろな楽器を持って集まっていました。
変だなと思ってチケットをよく見ると、コンサート会場は佐賀市文化会館と書いてあ
りました。今いる所は佐賀市民会館。目が点になりました。コンサートの開幕時間が
迫っていました。『佐賀市文化会館ってどこよー』と叫びました。まぎらわしいので名
前を変えて下さい」という葉書でした。

さだまさしが、「僕も間違えて行ってしまった。中学生がトロンボーンとかを持って、
うろうろしていて変だなあと思った。吹奏楽の大会があったようです」と笑った。

ちなみに佐賀市文化会館は佐賀市日の出一丁目 21-10 で、佐賀市民会館は佐賀市水
ヶ江 1-2-20。これは本当にまぎらわしい。四月十四日に、さだまさしのコンサートが
あったのは佐賀市文化会館大ホールでした。

小田原市にも、以前、小田原市民会館と小田原市中央公民館があった。ある日、娘
の琴の発表会に花束を持って小田原市民会館に行った。ところが、琴の発表会は小田
原市中央公民館だった。チケットを見て仰天した。小田原市中央公民館にたどり着い

た時には、すでにコンサートは開幕していた。さだまさしのテレビを観ていて笑ったのは言うまでもない。

ちなみに小田原市民会館は駅の南の海側の小田原市本町一丁目5の12にあり、小田原市中央公民館は駅の北の山側の小田原市荻窪300番地にある。徒歩で、間違っ
て小田原市民会館に行ってしまった人が、小田原市中央公民館に行くには、駅を越え、
山坂を越え、かなりの時間がかかる。現在、小田原市中央公民館は「小田原市生涯学
習センターけやき」という名前に変更され、通称「けやき」と呼ばれている。すぐ定
着した理由は簡単です。小田原市中央公民館は、「けやき通り」にあるからです。佐賀
市文化会館と佐賀市民会館も、何とかしてあげたいなあと思います。

贈物

人にプレゼントしても、次に会った時、その人から「ありがとう」という言葉を聞
かなくなりました。昔は「先日いただいた物は、とてもおいしかったです」「勉強にな
りました。感謝です」「役に立ちました。どうもありがとう」と挨拶したものです。人
は物を受け取った時、「ありがとう」と言います。これは常識で、普通の事です。もら
ったものが、美味しく、役に立ち、おもしろい物であれば、次の機会にくれた人に会
った時には、「ありがとう」と言うものです。そして、なにかと話題にします。感動が
無い場合にはどうでしょうか？「ありがとう」は言わないのです。言い忘れる場合も
ありますが、それは、たいして感動をしていないからにほかなりません。だから、安
易に贈物はできません。

好物

私はブドウパンが好物です。ある日、そのブドウパンを、両手で握りしめ、少し

ずつ、かじりながらテレビを観ていた。すると生まれたばかりの小熊が、ワイワイと普通の民家の白い車の周りを駆け回っていた。その家の奥さんが、「この子は、親にはぐれて道にいたのを家に連れて来たのです。ブドウパンが大好きなんですよ」と言った。

小熊は、もらったブドウパンを、前足で持って車に寄りかかって座り、私と同じように少しずつ、かじった。そして私に向かってウインクをし、「仲間だね」と手をふった。

その後、また、ドスドスと車の周りを走り回って愛きょうをふりまいた。「あと一ヶ月ぐらいしたら山に返すんですよ」と奥さんが言った。私は、ブドウパンをかじるたびに「今頃は、山で元気になっているだろうか」と、小熊の事を思うのでした。

さかなクン

平成二十二年(2010年)十二月二十三日。国民に向けて誕生日にあたり、天皇陛下の御言葉が放送された。その中に「さかなクン」という発言があったので、日本中が「ギョ!」となった。絶滅魚とされていた「クニマス」という淡水魚が再発見された。日本の固有種が七十年ぶりに再発見されたのだから快挙だ。それで、動植物に関心の深い天皇陛下から、「さかなクン」がほめられた。

「さかなクン」は、高校三年生の時に出演した『TVチャンピオン』(テレビ東京系)で、魚の知識を競って準優勝し、その後に五連覇したことで、知られるようになった。今は、イラストレーター、タレント、東京海洋大学客員准教授として忙しい。ただし大学の授業は受け持っていないそうです。

クニマスは、秋田県の田沢湖にのみ生息していた淡水魚で、酸性の川からの導水工

事が原因で絶滅したとされていた。しかし、田沢湖から山梨県の西湖に移されていたクニマスが七十年間生き続けていたことがわかった。京都大学の中坊徹次教授(魚類学)や秋田県立大学の杉山秀樹客員教授の継続的研究がなかったら、再発見はなかったかもしれない。中坊教授は、イラストレーターとしても知られる「さかなクン」に「クニマスの絵を描いてほしい」と依頼。「さかなクン」は、できるだけ忠実に再現しようと、山梨県・西湖の漁民からヒメマスを届けてもらった。するとその中に、変わった魚が含まれていることに気づき、中坊教授に連絡。大発見につながった。西湖にクニマスが何匹生息しているか? その生態は謎です。

「さかなクン」の言葉

「みなさま、おはようギョざいます」「今日も、元気にレッツギョー」

「それでは、ギョ一緒に観ましょう」「ギョ注目で、ギョざいます」

「さかなクン」は、魚の説明だけでなく、食べ方も教えてくれます。人気の秘密が理解できます。私も、「さかなクン」が大好きです。

蜘蛛

絶滅寸前の「クニマス」については、マスコミが大きく報道したので知られたけれど、「蜘蛛」の場合はどうでしょうか。蜘蛛の事など知らないし、絶滅しても私たちの生活に何も影響が出ません。みんな気味が悪いから、絶滅してもいいと思っている人もあるかもしれません。現に、ディズニーランドは人工的に作られた場所で、きれいに整備され、生け垣にも蜘蛛はいません。蜘蛛の研究者である夫は、子供たちを連れてディズニーランドに行った時、蜘蛛の採集を試みましたが、いませんでした。ディズニーランドにかぎらず、自然が破壊された場所には、虫がいけません。虫がいなくな

っても困りませんが、結局は、本当に鳥や魚や虫がいなくなってしまう。鳥や魚や虫が沢山いるということは、自然があるという証拠なのです。自然が全て破壊され、そこに人間だけが生きているというのは不自然です。今、自然との共存を考える時です。みなさんの周りに、蜘蛛はいますか？

アリ

私の小学校では、全校でアリを飼うという授業があった。だれが言い出したのか、なぜそうなったのかなど詳細は不明だが、全校生徒が思い思いのビンに砂を入れアリを飼育した。

牛乳ビンの子がほとんどだったが、中には一升ビンの子もいた。毎日、家からアリの入ったビンを持って登校し、全クラスの窓際にはアリのビンが並んだ。そして帰宅する時、持ち帰った。一升ビンの子は、それを抱えて登下校した。ランドセルを背負った小さな小学生が、一升ビンを大事にかかえて道を歩いているのです。今、その時の事を思い出すと、笑ってしまいます。

エサは、砂糖やビスケットだったと思います。透明なガラスビンなので、中に入れたアリの巣が、よく見えました。観察記録をつけている子もいましたが、ほとんどの子は、何もしていませんでした。ただ、先生からアリを飼うように言われただけで、アリの行動に興味があったわけではなかったからです。第一、田舎の子供にとってはアリなど珍しくもなかった。しばらくすると、先生から指導がないままに、アリの飼育は終わりました。だれもビンを持って登校しなくなった。ビンを持っての登下校は面倒だったから。

しかし、この時からアリに興味を持った子がいた。その子は大学を卒業すると小学

校の教師となり、アリの研究者になった。アリの論文や本は多数。世界最大のアリ、世界最小のアリなど、アリの話は生徒に人気です。また、アリに興味を持つ子供が育つといいと思います。

聞きなし

「聞きなし」は、生物用語です。動物の鳴き声を人の言葉で表すことをいいます。一般的に一番よく知られているのがウグイスの鳴き声の「法、法華経」です。コジュケイは「ちょっと来い」、ホトトギスは「東京特許許可局」と聞こえたりします。

「キジバト」の聞きなし

夫が教鞭をとっていた小田原市の県立女子高校で「キジバト」の鳴き声を聴かせて「聞きなし」のレポートを書かせた所、「オードリヘップバーン」と聞こえたという生徒があったそうです。キジバトは普通「ボーボー」と聞こえるだけですが、若い人の柔軟な心には、そのように響いたのでしょう。すばらしいです。

「よしくん」の聞きなし

昔、わが家では大きなスピッツの雑種「よしくん」を飼っていた。夏のある日、静かな家の中に突如「ウイスキー、ワン」と、太い男の声が響いた。それは、よしくんの鳴き声だった。私だけでなく娘も聞いて、「今、ウイスキー、ワンって聞こえたよ」と言った。私は、今でも不思議に思っている。本当に、そう聞こえたのです。その後、よしくんはフィラリアで死んでしまいました。

「ろくちゃん」の聞きなし

野良猫の「ろくちゃん」は、盛りが付いて「ニャーオン、ニャーオン」と鳴きながら家の周りを廻っている。朝、六時ごろ鳴き声が聞こえた。耳を澄ますと、低い太い

声で「おばあちゃん、おはよう」と鳴いた。私は仰天した。そして、複雑な気分になった。ろくちゃんには、すでに私は「おばあちゃん」と映っていたのか。隣の部屋で寝ていた娘を起こして「今の聞いた？」と聞くと、「ぐっすり寝ていたから、全然聞こえなかった」と言った。そして、「猫におばあちゃんなんて言われて、そりゃ、おかしいね」と言って笑った。私も一緒に笑ってから「ね、すごいでしょ」と言ったが、ますます複雑な気分になった。

「コオロギ」の聞きなし

子供たちが小学生の頃、「童謡の会に興梠花子さんが入会された。珍しい名前だね」と話すと、三年生の次女が「コオロギが鳴くというのは変だね」と言い出した。すると五年生の長女が「虫類は、羽をこすり合わせて音を出す。羽をこすり合わせる音も、犬や猫が鳴くのも、全部鳴くというんだよ」と説明した。次女は「すごいな、何でもよく知っているな」と長女に感心した。長女は威張るでもなく、わが家では、そんな会話がいつも普通だった。長女は、旅行に行った事、一度見た映画の事、会った人の顔と名前などよく覚えていた。「虫は羽をこすって音を出す(摩擦音)。これを鳴くという」というのは、夫が連れて行った自然観察会で覚えたのでしょ。私も、次女と一緒に改めて認識したことでした。

唱歌「虫の声」に出てくる虫は次のように鳴いている。

マツムシは「ちんちろちんちろ、ちんちろりん」

スズムシは「りんりんりんりん、りいんりん」

クツワムシは「がちゃがちゃがちゃがちゃ」

ウマオイは「ちょんちょんちょんちょん、すいつちょん」

『新訂尋常小学唱歌』掲載の時、改訂された二番の「きりきりきりきり、こおろぎや」は、『尋常小学読本唱歌』(文部省)明治四十三年発行の初出では、「きりきりきりきり、きりぎりす」と韻を踏んだ詩でした。国語読本では、韻を踏んだ詩の学習教材でした。当時の子供は読本(国語)と唱歌(音楽)の両方の授業で、この作品を学びました。

「きりぎりす」を「こおろぎや」に改訂した理由は、他の虫が秋の虫なのに「きりぎりす」は夏の虫である。「きりぎりす」は、「きりきりきりきり」とは鳴かない。「ギーッチョン」または「チョンギース」と鳴く。古語の「きりぎりす」は今日の「こおろぎ」を意味していた。

太宰治の短編小説『きりぎりす』(新潮文庫)にも、最後に「こおろぎ」が鳴くシーンが登場します。

では、それぞれの鳴き声を聴いてみることにしました。今は便利で、インターネットで虫の声が聴けます。学習意欲があれば、いくらでも勉強できます。しかも楽しい。「こおろぎ」は、さまざまな種類がいて異なる鳴き方をする。「きりきり」と鳴くのはカマドコオロギ。「コロコロ」と鳴くのはエンマコオロギ。昔はカマドコオロギが多かったようです。

最後の「ああ おもしろい虫の声」の「おもしろい」は、今でいう「旅行に行って、おもしろかった」「ゲストが、おもしろい事を言った」ということではなく、「心をひかれる、趣が深い、風流」ということです。

他の虫が激減しているのに対し、秋になると、ひときわけたたましく鳴くのは「アオマツムシ」。明治時代に中国からやってきた外来生物で、街路樹や公園で「リューリューリュー」と大声で鳴き大繁殖している。「アオマツムシ」が鳴きだすと、風流とは程遠くなる。秋の夜長を鳴き通している。

猫舌

猫は、熱いものを食べるのが苦手です。与えられた物が熱いと食べません。食べられないのでお皿をひっくり返す利口な猫もいます。それを一般に「猫舌」といいます。犬も、熱いものを食べるのが苦手です。与えられた物が熱いと食べません。しかし、「犬舌」とはいりません。なぜでしょうか。

犬は、泳ぎます。その泳ぎを「犬かき」といいます。猫も馬も泳ぎます。その泳ぎ方は犬と同じです。しかし「猫かき」とか「馬かき」とはいりません。なぜでしょうか。

人間も、「猫舌」や「犬かき」という言葉を使います。猫でも犬でもないのに不思議です。

私は猫が泳ぐことを知っています。その猫には申し訳ないのですが、思い出すたびに笑ってしまいます。まだ小さかった頃、親戚の家に行きました。国府津の駅の東海道線と御殿場線が交差するガードのすぐ下、大きな神社の手前に、その家はあった。二階から猫を落とした。猫は下の池に落ちた。泳いで這い上がり、「ひどい目に合ったぜ」と言わんばかり、命からがら痩せ細って戻って来た。毛皮から水を垂らし、みんなが食事をしている畳の部屋に上がって来たので、いつもは物静かな奥さんが「猫が、びしょ濡れだわ。畳が濡れる。大変、大変!」と叫んだ。そして、猫を外に蹴飛ばした。猫は悲鳴を上げて退散した。当時、ぼんやりして無口で存在感の薄い私が、猫を池に落としたとは、誰も思わなかったようで、追求されなかった。バカな猫が、自分で池に落ちたのだらうぐらいで終わった。

あの時、私は猫が泳ぐのを、確かに見た。感動的だった。叫んでいた奥さんは最近亡くなり、家のあった所は、更地になり近所の子供がキャッチボールをしている。

笑い

ある時、テレビにエドヤ・マネキネコさんが出演していた。若いその女性お笑い芸人は、なんと客を笑わせる前に、自分で「ぷっ」とふき出して笑ってしまった。結局、私たち聴衆は何も笑わない内に時間になりました。自分で先に笑ってしまったのは、笑いを取れないものです。その失敗は、沢山の事を教えてくれました。他人の失敗は、自分の教訓になります。

夫が「お笑い童謡の会と名前を変更したら」と言ってくれるほど、私の童謡の会の会場は笑い声がいっぱいです。これからも、笑って歌って暮らして行きたいものです。

相撲

平成十七年(2005年)、夕方から大相撲大阪場所を見ました。館内は、大入り満員。朝青龍の優勝をかけた魁皇との一戦が今日の見所です。私は、「魁皇、お願い!」と応援し、おじいちゃんたちは「朝青龍、がんばれ!」と応援しました。朝青龍は、今場所金色のまわしを締めていましたが、昨日負けたので、いつもの黒いまわしで土俵に立ちました。この世界にかぎらず、勝負の世界では、ゲンをかつぐのはあたりまえのことです。最近、力士が締めるまわしも、行司の衣装も色鮮やかで立派です。

立ち合いに「それ!」とみんなで声をかけました。力相撲となり、土俵中央で、魁皇が投げ飛ばされました。「強い」と私が言いました。「よし、優勝か」とおじいちゃんが言いました。おばあちゃんが、「朝青龍が勝ったね。懸賞をあんなにもらった」と言いました。アナウンサーが「賞金を右手で受け取りました。千秋楽を待たずに、先場所につき、朝青龍の優勝が決まりました」と言いました。朝青龍は、左利きなので

この日、フランスのシラク大統領が観戦されていました。普通のマス席での観戦だったので、警備は大丈夫なのかなと心配しました。説明を聞き、メモを取りながら観戦されています。最後に、「シラク、シラク!」の手拍子でみんなが送りました。アナウンサーが「失礼かと思いますが、『シラク』と、大阪の大相撲ファンの間から『シラクコール』が湧き上がっている所です。大阪らしいです。シラク大統領夫妻が客席に手を降って応えられ、会場を後にされます。私たちも、うれしい気分になりました。シラク大統領が、気さくないいおじさんに見えました。

昔は、掘り炬燵に入ってミカンを食べながら、みんなで相撲を見たものです。その頃は、柏戸と大鵬が活躍していました。おばさんの家族(母の妹と娘二人)も来て、一緒に見ました。そのまま風呂に入って帰りました。おばさんは縫い物の内職で生計をたてていました。

私は、両親が教員をしていたので、昼間は、おばさんの家で遊びました。おばさんも、従姉妹たちも、やさしくしてくれました。楽しい思い出がたくさん残っています。

お祭り

御殿場線の線路むこうに大きな神社があります。毎年のぼりが立って、秋祭りは盛大で、みんなが楽しみにしていました。

みこしの先頭は厄払いの天狗が歩きました。その天狗は、神社を出る時、赤い鼻の高い天狗の面を付け、金ぱくのほどこされた烏帽子に豪華な装束で、手にはジャラジャラ音のする鉄の輪の付いた棒を持ち、一本下駄を履いていて、だれよりも背が高く、いばって歩き勇ましかった。

続いて男達が、みこしを担いでねり歩いた。鉢巻、印半纏に白いパンツ、そして白

い地下足袋。裸で、さらしを巻き、ふんどしの男もいた。かけ声は「やいとうさっせ!」
「やいとうさっせ!」という珍しいもの。小学生の男の子が、「遠藤先生って聞こえる
ね」と言っていた。

子供たちはその後をついて歩き、お菓子やジュースをもらった。道沿いの家々では、
御祝儀を出すのがならわしだった。みんながお祭りを楽しんだ。

集落中をお祭りがねり歩き、神社に帰るのは夕刻になった。打ち上げ花火が終わり
の合図。

みこしを担いでいた男たちは酒を飲んで真っ赤に酔っていた。酔いつぶれて道に寝
込む男もいた。中でも天狗が最悪であった。あれほど勇ましく神社を出て行った天狗
は、両側から支えられ、手には一本下駄を持ち、はだしでした。履きなれない下駄で、
足の親指と人差指の間が痛くなったのでしょうか。天狗が一番酒を飲まされたので、べ
ろべろに酔っていました。だらしない天狗でした。

私が小さい頃は、天狗が毎年いたのに、最近では見なくなりました。天狗の役をや
る男がいないのでしょうか。担ぎ手の男の人も、ついて歩く子供も少なくなりました。
何よりも、お祭りの見物人が少ない。他に娯楽が沢山あるからでしょうか。「やいとう
さっせ!」のかけ声が耳に残っています。私も私の子供たちも、このお祭りが大好きで
した。

夢か

本当の事だったのか、夢だったのかわからない事を、沢山覚えています。思い出す
たびに不思議です。

「紫の山」は夢か

小学生の頃、昼寝から目覚めて裏山の松田山が紫色なのに気が付いた。驚いて見ていると、すぐ夕方の普通の山の色になり、暗くなった。その紫の山は、異様な色だった。

大人になって、ピアノ教室に京都から引っ越してきた子が入会した。その子が、「私は、京都の山々が紫色になったのを見た事がある」と言い出した。本当に山が紫に見える時があるのだと確信した。私は、もう一度見たいと思っている。

「ありえない風景」は夢か

小田急線の新松田駅を利用している。中学生の頃、踏切の近くに立って見ていると、「バスターミナルには、バスもタクシーも乗用車も一台もなく、人もいない」「踏切の遮断機が下りていて、小田急線が上りも下りも走っている」「小田急線のトンネルの上を御殿場線の上りが通過中」。この状況は、今までに一回だけの体験で、その後、今日に至るまで一度も目にしていない。私は、もう一度見たいと思っている。

「奇妙な車内」は夢か

高校生の頃の事です。小田急線で小田原方面に帰るのだが、間違えて片瀬江の島行きに乗ってしまった。気が付いて次の駅で降り、乗り換えようとしたその途端、私が乗っている車両の、私が座っている側の全員が席を立てて降りた。逆に、私が座っている反対側の席には、全員が座っていた。座っているのは、会社員、学生さん、老人、主婦、普通の一般の人たちで、本を読んだり、話をしたり、居眠りをしたりしていた。私は、降りる時を逸して次の駅まで乗った。私だけがポツンと一人こちら側に座り、反対側の席には全員座っているという珍しい光景だった。その後、二度とそのような奇妙な車内を見ることはない。私は、もう一度見たいと思っている。

「習わぬ経」は夢か

小さかった頃、よく高熱を出した。両親は教師をしていたので学校を休んで病院に連れて行くことはなかった。私は、「おたふく風邪」の時、一度だけ母が学校を休んで病院に連れて行ってくれたのを覚えているが、それ以外は熱が出て、頭に濡れ手ぬぐいを乗せて、一間廊下で寝ていた。それで治った。軽い病気は、寝ていれば免疫力が高まり治るものです。理にかなっています。

一間廊下で寝ていると、寺から念仏の練習が聞こえて来た。だれかが間違えると、また最初からやり直しであった。難しい所を練習しないので、何度も同じところで間違えていた。そして、また最初からであった。私は、この頃、少し念仏が唱えられた。これぞ、「習わぬ経を読む」であった。

「塩辛おばけ」は夢か

ある日、高熱を出して夢を見た。大きな太い一本の塩辛が私を追いかけて来る夢。うねうねと、それは二階の屋根より大きかった。それが、うねうねと追いかけて来た。夢だとわかっている夢で、今でもその恐怖が残っている。逃げても、逃げても追いかけて来た。・・・そのピンクの塩辛は、本当においしいそうだった。私は、塩辛が大好きです。毎日でも食べたい。

「夢の中」の夢

本当の夢です。ステージでは、今まさに私が主宰する童謡の会のコンサートが開催されていた。「みんなで歌おう夢にとどくまで 友だちコンサート」、「あしがら童謡祭」、「めだかの学校を歌う集い」などです。ステージも客席も満員で、立ち見の人が、文句を言っています。その中を、「鳩サプレーは、いかがですか?おいしいですよ。一口食べると飛びますよ。青い空の彼方に行ってみませんか」と、私が鳩サプレーを売り歩いているのです。肩から背負った駅弁売りのスタイルです。弁当売りは、昔、東海

道線の小田原駅で見た事があります。

一方、ステージでは私が指揮をして、みんなが楽しく童謡と唱歌を歌っています。いつものように、いい気分になって来ると言うセリフ「いいですねえ」を連発しています。夢だとわかっている夢です。またいつか、みんなでコンサートをしたい願望があります。コンサートでは、踊ったり、歌ったり楽しかったなと思います。

寝る

夫によると、一緒に暮らしていた祖母に「右を下にして寝ると心臓に負担がかからないよ」と教えたそうである。亡くなる頃に、「右を下にして寝るのを教えてもらったので、いつもそうして寝ていた。ありがとう」と感謝されたそうです。

ところが、最近『NHKきょうの健康』という雑誌に「寝る時は、左を下にする」と書いてあり、図まで付いていた。私は驚いた。夫も、「そうでしたか」と言った。

さらに驚くことに、平成二十三年(2011年)五月三日、民放のテレビを観ていたら、「食後のゴロ寝は体に良い。ゴロ寝の方法は、右を下にして寝る。一時間以内。それ以上だと太る。右を下にすると、胃から十二指腸に食物がスムーズに流れる」と解説の先生が言った。司会の恵さんが、「なるほどね」と言った。私も納得した。

本当は、どうなのだろう。「食後のゴロ寝の時は、右を下にするのか」、それとも「夜寝る時は、左を下にして寝るのか」。考えていたら寝られなくなった。真剣に悩んでいる。

数え方

役場の職員が言った。「知っていますよ。その人って、僕の二個上の人で、一個下に妹がいる人ですよ。何か変だなと思ったが、その時は、そのままになった。

年齢や学年を「個」で数える人が増えている。この場合は、「二歳」とか「一年」と数えるべきでしょう。私を含めて最近の大人は、間違いに気が付かないのか、若い人に注意というものをしない。さらに、自分たちまでが間違っただけの言葉を使い、それが新しい事、カッコいい事のように思っているようだ。大人がそうなのだから、美しい日本語を維持していくのは難しい時代になってきている。

真鶴

真鶴は、駅から坂を下ると海に出る町です。名前のように、上空から見ると、鶴が羽を広げたように見える半島です。通称「お林」という原生林があります。スダジイ、クスノキ、クロマツ、アオキなどの大木が生い茂る林です。そこに、ヤマゲラ、コゲラ、シジュウカラ、エナガ、メジロ、トビが来ます。海には、イソヒヨドリ、クロサギ、ミサゴなどが来ます。魚や貝、海草が豊富にあり、植物や動物の楽園です。

私が小学生だった頃には、真鶴岬に水族館があり、三ツ石海岸と共に、子供会や小・中学校の遠足の定番でした。水族館は、しばらくすると無くなってしまいました。目の前の海で見られるものばかりが展示してあるだけだったからです。管理も悪く、しまいには悪臭がしていました。

与謝野晶子が真鶴を詠んだ一首が残っています。三ツ石を見下ろす岬の先端に、その歌碑はあるが、ほとんど知られていない。

わが立てる真鶴が二つにす

相模の海と伊豆のしら波

晶子

駅から役場を過ぎると岩海岸に出る。岩海岸には、石橋山(小田原市)の合戦に敗れて兵力を失った源頼朝が再起を図るために安房(現・千葉県)へ船出したという逸話が残っている。

ここは、夏になると海水浴客でにぎわう。私は小学生の頃、毎日父のバイクの後ろに乗り、連れて行ってもらった。父の目的は二つで、娘を泳げるようにする事。もう一つは、「夏に肌を焼いておくと、冬に風邪をひかない」という理由でした。一人娘のために、父は一生懸命でした。現在では、強い紫外線は皮膚癌になることがわかっている。しかし、昔は知られていなかったから、みんなが競って肌を焼いた。

父は、国府津の海で育ったので泳ぎは得意だった。ある時、岩海岸の右側から左側にかけて抜き手を切ってクロールで泳いで見せてくれた。その場にいた人々が拍手喝采をするほどすばらしい泳ぎだった。父の誇らしげな顔を覚えています。結局、私はいつまでたっても泳げるようにならず、冬には毎年風邪をひき、春と秋にはアレルギー・鼻炎・喘息・蓄膿症に悩まされた。

私に子供ができると、今度は子供たちを連れて海水浴に行った。本当に楽しい思い出です。私の父も、楽しかったことでしょう。子育ては、親にしてもらったことを、また自分の子供にもしてあげるという連鎖があるようです。それは、楽しい・うれしい事の連鎖であることが望まれます。

岩海岸の正面には「遠藤貝類博物館」があった。ある時、海水浴の帰りに子供たちと一緒に立ち寄った。入館者は私たち三人だけだったので、館長の遠藤氏が付き添って説明をして下さった。南の島の海岸で採って来たという黄色やピンクの貝に子供たちより私が興奮した。その美しさは夢のようだった。一つのコーナーが見終わると、遠藤氏は電気を消した。照明が当たると色があせるからだと後で知った。貝の切手も

展示してあった。最後に、色とりどりの南の島の貝殻をいただいて、大喜びで帰宅した。三人分なので大量である。それは、今でも家の宝となって保管されている。博物館には奥さんと「ゆきちゃん」という白い大きな猫がいた。抱くと、ずっしりと重かったのを覚えている。後日、遠藤氏が亡くなったことを神奈川新聞で知った。

私は真鶴町の教育委員会が企画した小学校のPTAと町民合同の童謡を歌う集い「しおさいセミナー」の講師をした後、「童謡を歌う会真鶴」を立ち上げた。大きなホールで、グランドピアノを使つての贅沢な童謡の会です。会員は熱心で現在も続いています。

真鶴には小さいころから沢山の思い出があります。その思い出は楽しい事ばかりです。美しい真鶴の海や町並みを眺めていると涙が出そうになります。

御殿場線

家の前を御殿場線が走っている。私の家は「松田駅」と、「相模金子駅」の間にあります。「相模金子駅」は無人駅で、のどかです。次の「上大井駅」は、ひょうたん駅として有名で、実を付ける夏から秋にかけてテレビで必ず放送されるようになりました。

国鉄の御殿場線は、かつて東海道本線でした。明治二十二年二月一日、国府津と沼津間が開通。昭和九年(1934年)十二月一日、丹那トンネルの開通で現在の東海道線が開通すると在来の山北経由は御殿場線となり、列車本数が激減。戦争で昭和十八年(1943年)七月単線化され列車本数は更に減った。

昭和四十三年(1968年)六月三十日に全線電化が実現(四月、国府津～御殿場間。続いて七月一日御殿場～沼津間全線電化が完了)、蒸気機関車は姿を消しました。最後の

SL「D5272」が汽笛を響かせ、国府津駅を出発(さよなら運転)、黒煙を上げながら終点の沼津駅へと向かった。御殿場線の沿線は、最後の蒸気機関車の雄姿を見ようという人々にぎわった。

昭和六十二年(1987年)国鉄の分割民営化でJR東海御殿場線となり現在に至っています。沿線地域の人々は、今も「御殿場線」と呼んでいる。

昭和四十三年(1968年)六月の引退後、「D5270」は、神奈川県足柄上郡山北町の鉄道公園へ引き取られました。

「D5272」は、地元の小田原城址公園に行く予定で話が進んでいましたが、文化庁が「国指定の史跡内にSLは不向き」とクレームをつけました。機関車の解体・移動・組み立ての費用や、「D5272」の状態が展示にたえられないとの理由で小田原市は、やむなく手を引きました。しかし、蒸気機関車は「貴重な文化財」という意見も出て、国府津の扇形機関庫を公園にして「D5272」を保存しようという計画が再び立てられました。小田原評定でまとまりませんでした。

この間、「D5272」は、ますます老朽化が進み、ついに解体処分と決定。ところが、昭和五十二年(1977年)九月の御殿場市定例議会で「蒸気機関車を購入し適当な場所で展示保存しよう」という意見が出て可決されました。国鉄出身の国会議員や市議会議員らの協力の下、国鉄側と話が進み、十月末には御殿場市への無償貸与が決定。

機関車は「D5272」ということで、話がすんなり決まりました。しかし、すでにぼろぼろ、悲惨な状態でした。それを、みんなの協力でよみがえらせ、昭和五十三年(1978年)八月十七日、御殿場市湯沢平公園で公開されました。現在は、「御殿場市SL保存会」の人々の手で大切に守られています。

小田原市に静態保存予定だった御殿場線お別れ列車「D5272」でしたが、結局、実物は設置できず、このため小田原城址公園には、豆汽車の「D5272」が走るようになりました。この事は、小田原市民もほとんど知りません。「おだわらシルバー大学」で『汽車ぼっぼ』の歌を指導した時、話した所、「え!本当ですか?」と聞き返されました。

豆汽車の運転手さんの話

「この汽車の前は、“おサルの電車”が走っていました。しかし、サルを先頭にさせての運行は、動物虐待とクレームが付き、取りやめになりました。サルが運転するわけではありませんしね。公園には、飛行機や観覧車がありましたが、古くなって危険ということで、飛行機が、続いて観覧車が廃止撤去されました。乗車賃 80 円は安いでしょう。桜の季節には行列ができます。運行時刻表はありません。お客さんが集まったようすで随時出発しています。私たちはパートで働いています。ボランティアではありません。私は、ずっと小田原在住です。」

私は、小さい頃小田原城址公園の遊園地で、「おサルの電車」や「飛行機」「コーヒーカップ」に乗った思い出があります。私の娘たちは祖父に連れられて「観覧車」や「ミニ・カー」に何度も乗りました。楽しい遊び場でした。

童謡『汽車ぼっぼ』のモデル

富原薫作詞、草川信作曲の「汽車ぼっぼ」は、最初「兵隊さんの汽車」のタイトルで発表されました。昭和十二年(1937年)七月七日に勃発した日華事変のため、国鉄御殿場線の御殿場駅の軍隊ホームから毎日大勢の兵士が戦地に送り出されるようになり、その戦地に赴く出征兵士を送る風景を見て、八月に御殿場市高根小学校の先生をしていた富原薫が作詞したものです。御殿場駅は富士山麓に陸軍の演習場があったことも

あり、明治四十三年(1910年)全国でも珍しい軍隊ホームになり、軍隊関係の輸送で賑わいました。毎日三十両から五十両にもなる長い貨物車には巨大な戦車や大砲が搬入され、これらが軍隊ホームに降され、御殿場は軍隊の町に様変わりしていました。戦争の激化に伴い、御殿場駅は、「万歳万歳」の声で明け暮れるようになり、この時分の兵隊輸送は東海道線を通さず御殿場線を利用していたので、出兵する兵士は昼も夜も列車で通り過ぎ、路線付近の住民達は夜中にはたき火をたいて、兵士を見送っていました。

私の母(大正四年生まれ)は、戦争の話は一切しませんが、唯一、「終戦のその日、御殿場線の線路を、兵隊さんが銃を放り出し、口々に『戦争が終わった!終わったぞ!』と叫びながら国府津の方へ走って行くのを見た」と言いました。日本の国民は、戦争はしたくなかったのです。戦争が終わったその日、みんなが大喜びをしました。敗戦でしたが、そのような事は関係なく、一般の国民は戦争が終わった事を喜び合いました。これが本音でした。すぐに、アメリカの生活様式が日本に入って来て受け入れられました。新しい衣食住、日本の国民は大喜びでした。

今は御殿場線に汽車は走っていませんが、私が小さかった頃は、家の前を石炭をこぼしながら汽車が走っていました。客車だけでなく、牛、馬、豚を乗せた貨車や、シートをかぶせて御殿場の自衛隊基地へ戦車も運んでいました。汽車の走る映画の撮影もしばしば行われました。

御殿場線に、もう一度汽車を走らせたいと思い、JR松田駅の駅長さんに尋ねました。駅長さんは即座に次のように話されました。

「今走っている電車と、昔の汽車とは、線路のレールの太さが違うので、汽車は走れません。走れるように整備されて残っている汽車もありません。石炭をくべる技術を

持った人がいませんし、石炭の経費は莫大で、それに見合った乗客数もいません。今後、JR東海御殿場線に汽車が走る事は二度となく残念です。

好きな言葉

好きな言葉は沢山ある。

「きゃぴきゃぴ」は好きな言葉

私は、派手な若い女の子を指して、「きゃぴきゃぴしている!」と言います。夫が、「もっと他に表現が無いのか」と言います。「これは、ただのクセよ」と答える。私だけが使っている言葉と思っていたら、NHKの朝の番組の女性のアナウンサーも「きゃぴきゃぴしている!」と言った。夫と顔を見合わせた。

「一世風靡」は好きな言葉

なんとなく好きで、よく使う言葉です。「この曲は、一世を風靡しました」と、まとめるのが好きです。使ってからカッコいいなあと思い、感動に酔いしれます。作曲家・いずみたくも、エッセイ集に「一世風靡」を連発しています。きっと好きな言葉だったのでしょう。

「重鎮」は好きな言葉

「北原白秋の後、その弟子である与田準一は文学界の重鎮でした」などと使う。「重鎮」は好きな言葉だが頻繁には使わない。「お父さんは、わが家の重鎮です」。

「御自愛下さい」は好きな言葉

私は童謡の会を主宰している。会員から手紙をもらう事が多い。最後に「先生、暑さ厳しき折、お体、御自愛下さいませ」と書いてあつたりすると、「しびれる」と感激する。にもかかわらず、自分で出す手紙に「御自愛下さい」と書いた事がない。これ

は年を取ってから使おうと思っている。まだ、その年齢ではない。

「ぞうさまもない」は好きな言葉

最近、頻繁に「ぞうさまもないことです」という言葉を使っている。嫌な事でも、この言葉を使うと、難なく終わらせることができる気がするからだ。私はテレビ時代劇「木枯し紋次郎」の熱狂的なファンなので、当然、中村敦夫著『俳優人生』（朝日新聞社）を読んだ。すると文中に「ぞうさまもないことです」という言葉があった。それで気に入って使っている。

しかし、今回読み直してみると、その言葉は文中の、どこにもなかった。思い込みの激しい私は、中村敦夫さんの波乱万丈の生き方が、カッコよく「ぞうさまもないこと」に映ったようだ。この言葉は、自信があり余裕がある人が使う言葉です。中村さんは次のように書いている。「私は文章を書くことは全く苦にならない。一日に二十枚書くのは困難なことではない」それは、「ぞうさまもないことです」と、私の頭の中で置き換えられたようだ。

嫌いな言葉

嫌いな言葉は沢山ある。

「真骨頂」は嫌いな言葉

アイススケートの試合で、アナウンサーがよく使う言葉です。たいした演技でもないのに「真骨頂!」を連発されると、バカにされたような気になります。他に表現がないのでしょうか。

「線引き」は嫌いな言葉

昔からある言葉だが、肝炎訴訟の裁判で頻繁に使われた。「線引きは不当」「全員救

済」が叫ばれた。「線引き」という言葉に好いイメージが無い。

「以上」は嫌いな言葉

戦争をテーマにしたドラマでは、決まって兵隊が上官に伝達事項を報告した後、かかとをそろえ敬礼して「以上です」とか、「以上であります」と言う。聞いて気持ちが悪い言葉ではない。戦後六十年、この言葉を使い、事をまとめて締め括ろうとする人がいるのを聞くとゾッとする。

「おみそれしました」は嫌いな言葉

童謡の会で男の人から「おみそれしました」と言われたことがある。この言葉は、「それまで思っていた事と違いました。すみませんでした。」と謝る言葉だが、謝っても、まだまだ上から目線です。気位の高い人が使う言葉です。言われた方は、それまでどのように思われていたのか。いやな気分になります。

「教師の悪文」は嫌いな言葉

私の母は教員だった。同僚の書く文や、私の担任が書く手紙を見て「教師の悪文」と批判していた。実際のところ、教員が書く文は、硬くて面白くないと相場が決まっている。自分自身は、きれいな女文字をスラスラと書いたが、うまい文章や手紙を書くところを見た事がなかった。本をたくさん読み、勉強はしていたが。私の父も教員だった。典型的な「教師の悪文」を書いた。「教師の悪文」とは、母以外の人からは聞いたことが無い。嫌いな言葉だ。

「貧しいは悲しい」は嫌いな言葉

「貧しいは悲しいと思います」などと話すと泣ける。私が組み合わせて作った言葉だから他の人が使っているのを聞いたことがない。家族や親戚や知人が亡くなると、しだいに使わなくなった。「貧しい」のを見るのは、とても「悲しかった」です。

テレビドラマ『木枯し紋次郎』の中に、「土地が貧しいと、悲しい話が多いものです」というのがある。このドラマは、天保の飢饉の頃の物語です。今の時代は、大部分の人が普通の生活をしている。私は、好い暮らしだと思っている。しかし、昔は、ほとんどの人が貧しかった。

昔、神社の隣にワラぶき屋根の農家があった。父親と母親が亡くなると、娘二人が残された。家には牛小屋があったが、牛は、とうにいなかった。姉は、おとなしい女で、近所の子守や農作業を手伝って収入を得ていた。しかし、その収入はたいした事ではなかった。妹は勝気で、男の姿をして土木工事に加わったりした。男の姿だと雇ってもらえた。次女は「ワシ」と自分の事を言い、男のズボンを履き、坊主狩りでした。しかし、どこから見ても女に違いなかった。土木工事は重労働だったが収入が良かった。二人は、そうして暮らしていた。ときおり姉妹喧嘩をしていた。次女は酒を飲んだ。姉が髪の毛をつかまれ、振り回されて悲鳴をあげていた。そのような時、怒りを暴露した次女は男の形相だった。二人とも教育を受けていなかったのだから、集落の人達から馬鹿にされていた。次女は「おなあちゃん」とさげすまれていた。生活は赤貧洗うが如くであった。

この二人は、正月とお盆にきれいな身なりをして私の家にやって来た。だれかに言われての事だった。「いい天気の良い正月だなあ」「元気か」と、父や母と話をして、母からお金をもらって帰って行った。お金はいくらだったのかわかりませんが大喜びでした。父と母が、「またおいで」と言うと、姉は、だまってお辞儀をしたが、妹は「おお、また来らあ」と言って帰って行った。お金を借りに来ていた記憶はないが、母がお金を持って行ってやっていたかもしれない。

なぜ、わが家に二人が関係したかは、六十年以上時代をさかのぼる。父と母は、二

人の父親と母親の仲人親だった。なぜ、仲人をしたのかは聞いていない。教員をしていたので頼まれたのでしょう。仲人は、これが最初で最後でした。集落の人からは、「オタクが仲人親だそうですねえ」と言われ続けた。わざわざ玄関まで言いに来る人もいた。その後、二人は施設に保護されたと聞いた。家は取り壊され、さら地になり、売られて新築の家が建った。今では、もう誰も「おなあちゃん」姉妹の事を覚えている人はいない。二人に、正月とお盆に私の家に行くようにと言ったり、父と母が仲人親だということを、ふれ回った人も亡くなってしまった。私は、この悲しい話を覚えている。「貧しいは悲しい」ものです。

一気飲み

小学校低学年の頃、外で縄跳びをして遊んでいる所にヤクルトの宣伝販売員が来た。子供たちに宣伝のチラシとヤクルトを一本ずつ配って、「この一本はただです。飲んで美味しかったらお母さんに買ってもらって下さい」と言った。みんなは一気に飲んだ。しかし、私はみんなのように一気に飲めなかった。「小百合ちゃんは遅いね」「いつもぐずぐずして、のろいね」「まだ飲んでるよ、とろいね」と、私を見てみんなが笑った。私は、甘いのが苦手で半分も飲めなかった。

ヤクルトは、最初の頃は販売員が各家に配達していたが、今ではマーケットで買える。私は買い物に行くと必ず買う。そして、帰宅して一気飲みをするが、いまだに一気には飲みきれない。ヤクルトは内容量 65ml。発売当時から同じで、手のひらに入るほど小さい。「生きて腸に到達する乳酸菌シロタ株」が売り物の製品。乳酸菌は舌が曲がるほどまずくて、甘味料を沢山使わないと飲めないと聞いたことがある。だから甘い。

近頃は『ヤクルト カロリーハーフ』カロリー五十パーセントが新発売になった。
夫が飲んで「なんか違う」と言った。甘くない、味が薄い。

娘が「俳優の渡辺謙さんがググッと飲んで宣伝すると説得力があるよね」と言った。
病氣と闘って頑張っている渡辺謙さんも一気に飲む。

命令

親が子供に、先生が生徒に、上司が部下に命令をする。この場合、共通しているのは力の強い者が、弱い者に向かって命令を出しているということです。弱者が命令することは、ありません。「あれをきなさい」「これをきなさい」「こうきなさい」と命令をします。命令を出した後に、二つの道が開かれます。

一つは、命令を出し続ける場合です。命令を出し続けるとどうなるでしょう。言われた相手は命令に従います。命令されたことを、やってはいるものの、それ以上の発展はありません。結果は命令どおり完了しますが、「楽しかった」「うれしかった」「またやろう」とは思わないでしょう。しかし、ある程度のレベルの結果は出るでしょう。

命令し管理する人を「親分」と言うことがあります。親分は命令を出し続け、結果を期待するあまり、相手から「威張っている!」と非難されることがあります。親分には教育的配慮はありません。したがって、非難されてもしかたがないものです。親分は非難には耳をかきません。その命令が、一生取り返しがつかない事態になってしまう事もあります。それでも親分は気がつきません。

もう一つは、いったん命令した後で、相手を見守る場合があります。それができる人を「教育者」と言います。信頼し期待された相手は、命令した者が思ってもみない大きな結果を出すことがあります。命令者を超越することになります。「教育者」も見

守りをおこたり、命令を出し続けると「親分」と同じ結果になってしまいます。多くの場合、見守りをおこたるので、よい「教育者」は少ないのです。

また、命令を出して見守っていても、相手が何もしない場合があります。それは、命令の出し方に問題があります。それに気がつかないのは「教育者」ではありません。こんなふうに、他人に命令するのは難しいものです。

両輪

「夫婦は車の両輪のようなものだ。どちらが欠けてもいけない」と、おじいちゃんが言った。これは名言です。つまり、ひとりでは意見や行動も一方的に走りやすくなるものです。一方がなにか無理な主張をした時に、他方は戒めることができますが、ひとりではどうなるでしょうか。そのまま発言したり、行動したりすれば疎まれます。

平凡な日常

八百屋で

キュウリとトマトを買った。「ここで先日買ったキュウリとトマト、味があって、おいしかった」と私が言うと、「地の物だからねえ」と、店のおじいさんがうれしそうに言った。なんでもない会話だが、最近このような会話がなくなった。

ゴルフ観戦

おばあちゃんがテレビに向かって言った。「あれが入れば、パーだな。私も叫んだ。「リョー君しっかり」。おじいちゃんも叫んだ。「オ、オー」。

アナウンサーが冷静に「九番はパー、首位は混戦となりました」と言った。それを聞いて、みんなで笑った。平和な昼下がりで。

茜ストアー

自転車で往復できる距離に気に入っている茜ストアーがある。いつ行ってもほとんど人がいない。たまに、おばあさんが手押し車を押して、一つ二つの品を買いに来る程度の店だ。知っている人には出会う事がまずない。だから気に入っている。

外見もボロボロで汚らしいが、中に入るとジメッとしていて薄暗く、明らかに売れないので白カビが生えているといった物も並べてある。全体から、臭いが漂って来るような店だ。店に客がいないのに、店員はレジをセカセカと打ち、土地の品のない言葉で対応した。品物をビニール袋に入れてくれないので、自分で入れなければならない。これら全ての風景が気に入っている。

・・・・・・道は焼けるような真夏の昼下がり、店内には漫画家・つげ義春の親子がいたような気がした。つげさんは、商品に触ったりして見ていたが、あきらかに買うつもりはないようだった。奥さんが鈴のついた赤い大きな財布を持っていて、男の子がカボチャを一個抱えていた。男の子は、夏風邪をひいているのか、咳をしていた。買った物はカボチャだけで店を出て行った。会話は無く、店は静まり返っていた。後日、つげ義春作品『富士見橋は泪橋』（池田企画）というタイトルの漫画本が出版された、というような店だ。

このような茜ストアーであったが、近所の大手スーパーマーケットが倒産してなくなると、大繁盛の店になった。町には他に買い物をする店がないので、みんなが押し寄せた。私は、しだいに行かなくなった。

雲の上はいつも晴れ

好きな言葉に「鳥鳴き花笑う」という慣用句があります。「花が咲く」の「咲く」は、

「笑う」の意味があります。童謡には湯山昭作曲の『おはながわらった』があります。

家族と仲間と歌のある暮らしはうれしいものです。そこには笑顔とはずむ会話があります。それは、みんなの願いです。

ひとひ おわ 一日の終り

一日が暮れて行く。

酒匂川の川岸のベンチにおばあさんが腰かけている。

静かな夕暮れ。

空が夕日に染まり、鉄橋を白いロマンスカーが駆け抜けて行く。

富士山には雪。

箱根山の稜線に夕日が沈むと急に寒くなった。

頭上を二羽の白い鳥が飛んだ。

そこにあるのは、いつもと何も変わらない風景。

平凡な一日の終り。